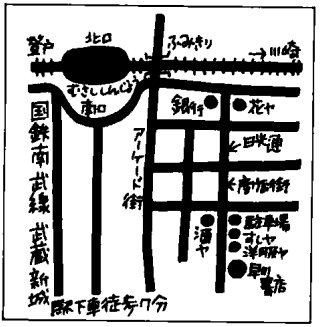
就職しないで生きるには❶

ぼくは本屋のおやじさん

早川義夫

晶文社

著者について
早川義夫（はやかわ・よしお）
一九四七年、東京生まれ。和光大学中退。
現在、「早川書店」主人。
住所－神奈川県川崎市中原区新城一－一六－一二
電話－〇四四（七五五）四八一六



〈就職しないで生きるには〉❶
ぼくは本屋のおやじさん
一九八二年五月一〇日初　版
一九八六年七月二〇日一六刷
著者　早川義夫
発行者　株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二－一－一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）
振替東京六－六二七九九
中央精版印刷・美行製本
© 1982 Yoshio Hayakawa
Printed in Japan
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉　落丁・乱丁本はお取替えいたします。

就職しないで生きるには❶

ぼくは本屋のおやじさん

晶文社

ブックデザイン　平野甲賀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぼくは本屋のおやじさん　目次

二十三歳の時である　9

ぼくは本屋のおやじさん　15

1　ぼくは商売に向いていない　17

2　なぜ本屋に欲しい本がないのだろう　32

3　本屋にはいろんな人がやってくる　43

4　リュック背負って本を買いに　52

5　ぼくの店は急行の停まらない駅みたいだ　61

6　本が好きだと、いい本屋になれないか　70

7　本棚が光ってみえるとき　79

8 本屋さんはおもしろいか？ 88
9 立ち読みにもうまいへたがある 95
10 注文された本を手に入れるには 102
11 大きな書店と小さな本屋 111
12 凄い客 119
13 ものの売り買いだけの関係ってステキだ 132
14 「紅い花」のブックカバー 139

書店日記 147

あとがき 199

二十三歳の時である

あまり思い出したくないのだが、僕は昔、歌を歌っていた。といっても、クラブ活動の延長のようなもので、おまけに、暗い歌しか歌えぬグループであったから、出演する場所はなく、たまにどこかへ歌いに行っても、楽器の運搬賃の方が高くつき、歩合制で契約していた事務所からの給料明細書はいつも赤字であった。

そのころ、すでに人気を得ていた連中は、ギターケースの把手のところに、航空便の荷札をいっぱいつけて、高そうな毛皮をそろって着ていたので、僕らもいつか、あゝいうコートを着れるようになりたいね、などとひまそうな体を事務所のソファに埋めながら、横目でつぶやいていたものだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

グループはあっけなく解散した。僕は二年ほど事務所に残り、制作側の仕事をしてから足を洗った。洗うなんて大袈裟だが、僕にとってはそうだった。スポットライトが当たっていなくとも、当たっているような錯覚に陥る世界だった。「もう歌わないんですか?」「どうして歌わないんですか?」という質問を、ごくまれに、嘘のようだけれどファンであったという人から受けるたびに、「どうして生きているんですか?」と言われているような気分に落ちこんだ。

二十三歳の時である。僕はその時、はじめて生活のことを考えた。もう、あまり人と接しなくてすむような、喋らなくともすむような仕事につきたいと思った。けたたましく電話が鳴りひびき、かっこいいと思っている流行語が飛びかわないようなところへ行きたかった。どこか、静かな田舎の方でおじいさんになれたらと思った。

事務所をやめたちょうどその日、家内が病気になってしまった。子どもの面倒を見に義理の母が泊りにきた。今思うと、あの時、女房が病気さえしなければ、今の職にはついていなかったかもしれない。僕は家でごろごろしながら、のんびり先のことを考えるつもりだったのだ。たとえば、この時とばかり、よくわからないけれど、旅行をしたかもしれないし、あきらめて、親の商売をつぐことになったかもしれない。とにかく、あせることも

なかったのだ。しかし、義理の母の手前、僕は家でごろごろしているわけにはいかなかった。さも仕事があるように、家を出て行かなければならなかったのである。

僕の行く先は決まっていた。偶然見つけたある本屋に、雇ってくれるかどうか聞いてみた。すると、ネクタイをしてこなくちゃ駄目だと言うので即やめることにした。次は、家から一駅歩くところぐらいの本屋を尋ねてみた。履歴書の動機欄に、五年後本屋を開きたいためと書いた。僕は、特別この本屋でなきゃいけないとか、本屋はこうでなくちゃいけないなんていうのはない。ふつうの本屋であることが最高であった。旦那さんと奥さんとでやっている小さな店だ。僕はモクモクと働いた。仕事を終え店を出ると、電信柱に貼ってある広告の文字がボヤーッとボヤケてしまうほどであった。

週に一度の休みは、よく古本屋に出かけた。毎日の仕事の帰りも別な本屋をのぞき、家で夕飯を食べたあとも近所の本屋へ行き、電車に乗って一駅か二駅先の本屋にも行ったりした。いわば、本よりも本屋が好きであった。見知らぬ人と出会うよりは、はるかに見知らぬ本の方がよかった。かこまれるならば本にかこまれていたかった。感触とか、形とか、印刷そのものが好きであった。

僕が勤めている間、一週間だけ見習いにきて、本屋をはじめてしまった若い女の子がいた。旦那さんは、できるのかなーと心配していたが、僕はうらやましく思った。資金さえあればできるのである。特別、修業なぞしなくとも、しくみさえわかれば、あとはすべて応用なのだ。こういう言い方をすると、長年本屋をやっている人たちや、ふだんから本屋に不満を持っている人たちは、だから本を知らない本屋が多いのだ、と言うかもしれない。しかし、本が好きであればいいのではないかと思う。好きであるということが一番大事なのだ。嫌なことを、やりたくないことを無理矢理やっているからトラブルが起きるのだ。今でもそう思う。

僕はあっちこっち場所探しに歩いた。当時、僕が持っていたお金では当然足りず、父の援助が必要であった。父は苦労して築きあげたタイプであったから、借りるならそれなりの説教を聞かねばならない。商売とは……、……とは、うんざりしたが僕はたえた。つまるところ、僕の描いていた海の見えるようなのどかな場所ではなく、父の持っていた土地を選ぶという線に落ちついた。銀行からお金を借りる手続き、建築のこと、取引のこと、僕の頭の中はいっぱいであった。採算分岐点、第一抵当権、全部チンプンカンプンである。計算された数字を見せられると頭が痛くなるほどであった。僕は、自分にできそうにない

ことは、はじめからあきらめていたから、それらは、僕よりもっとわかっていないうちのにやってもらうことにした。僕は、僕のできる範囲のことを一所懸命やるかわりに、僕のできないことは、特別得意なものはありませんという人がやるしかないのである。僕が嫌なことというのは、つまらないことだ。たとえば家を建てる時、上棟式というのがあり、棟梁に御祝儀を渡してナントカカントカということが嫌であった。そういうナントカ式が駄目なのである。だから、取次の人から開店披露パーティに出版社の人を呼んで、挨拶して、などと言われた時、いっぺんに疲れが出た。結局、うやむやにしてやらず、あと二、三日で内装も完成という時に引越しをし、と同時に、本がドーッと入り、一日おいて開店となった。まるで、逃げるように、凄まじいいきおいであった。

ぼくは本屋のおやじさん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com